

特35

868

玉

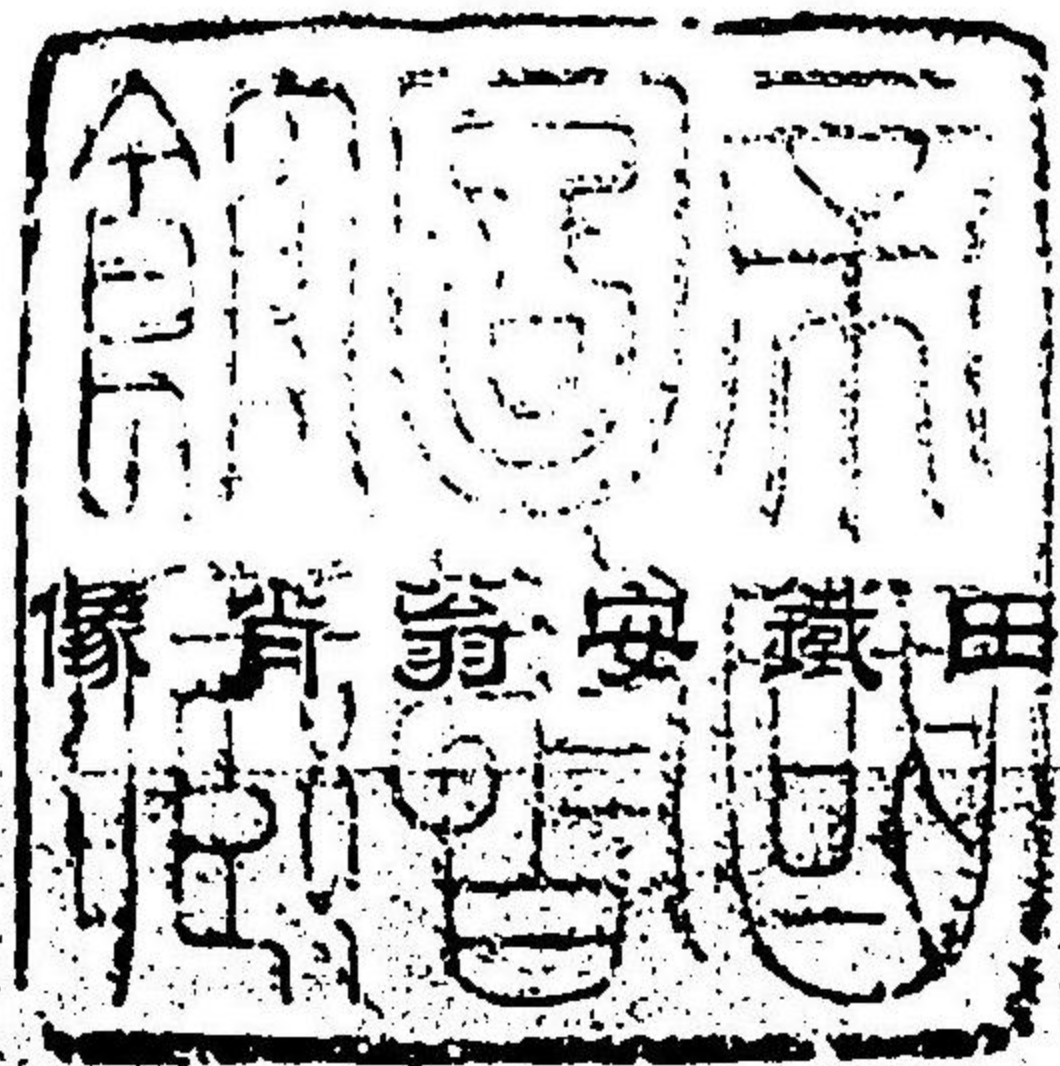
の

緒

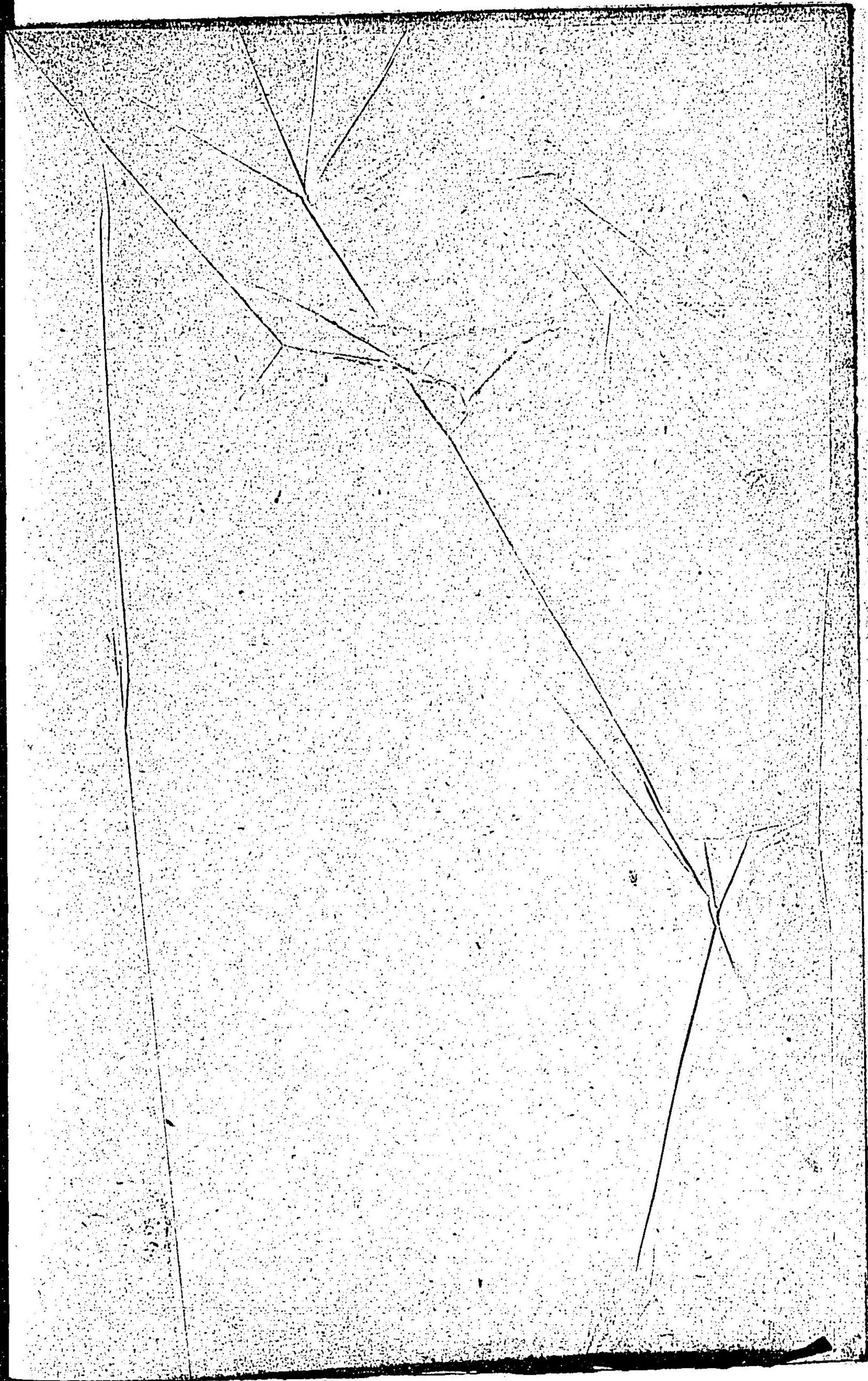
一  
卷二

坂田安翁肖像





坂田鐵安齋



この書は明治三年藏安翁より辨官へ送出されし者にて抑一教獨立の端緒を開きし事明かふして本教の從事もる者克く心得置べき義なれをこゝに掲げつ

申上候口上覺

白川前伯王殿御門臣ニテ積年神道執行罷在若干ノ門人御座候然ル所此度於天朝宣教建サセラレ候ニ付テハ不應御官教方仕候テハ奉恐入候間万事蒙御差圖舊弊ノ儀ハ速ニ相省キ門人共ニ教示仕國家へ微忠ヲ盡度奉存候若ニ付門人小田愛之助ヨリ申上候通相違無御座候得共門中ト唱候中列等有之右等取締方且ハ積年修行之次第巨細ニ申上度宣教方へ拜謁仕度此旨宜御取次頼上候以上

白川三位内

午三月七日

坂田左京



佛許りなりおまなまのり来い時となりて  
 吾神の道のまよふらみいふ息よきいから  
 ざるが故りいひ同く寫本の申より援  
 出てかく下副と押せよらりしることなぬ  
 あらも門中の人よをのりつるわらり行  
 付ても克く道ふはひて人の縁をつくし能く  
 大人のまよふまよふりて名をもきて切とも願  
 神まがらのさごとお復達へともあなりのこ

明治三十二年六月十日 禊教管長坂田安治

玉の緒巻二目録

祝詞歌	一丁	
むすび直しのこと	三丁	高橋龜次郎 田部井伊惣次
玉に瑕	四丁	加野藤
子守のこと	六丁	門中
内清淨	十三丁	鐵教
家業のこと	十八丁	栖原
見ぬ孫	二十丁	みぢ女

假の姿

二十二丁

片岡啓次郎

修身齊家

二十五丁

澁澤六左衛門

手習子

三十七丁

武胤

目錄終

玉の緒

卷二

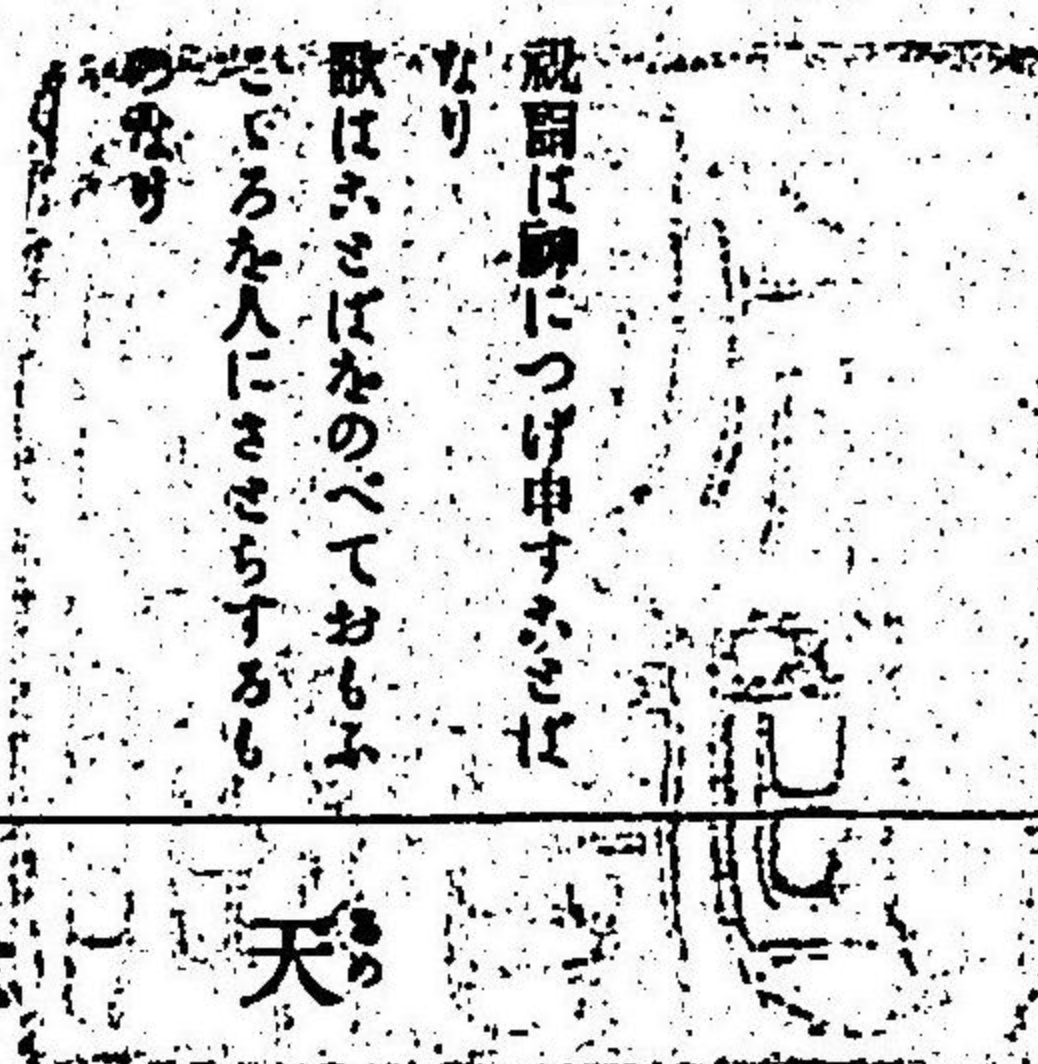
禊教管長坂田安沼謹撰

祝詞歌

天地の恵を受けて草も木もみな大君のもの  
なれば何れかもあるし物あらむあやまたふ

こき此道は君のゆるしの道なればわけて

是非申すべき其源の大君をまもらひ仕へ



道は惟神の大道なり

祝詞は神につげ申すふとば  
歌はふとばをのべておもし  
たぐるを人にまごらするも  
なり

をほめたからは萬民の事  
にて凡天下の天皇の比類な  
き御寶は萬民なれば大御寶  
と申すなるべし

奉り神と君との御惠を知らせむ爲の教な  
り然るをたゞ我身の爲と思ふゆゑおのが  
まゝなる心より彼を悪み是をめで神の御  
末の人なれば御寶と知らずして我と彼と  
をへだてつる心のうちぞ淺ましきあな淺  
ましの思ひぞと我とわが身をかへりみば  
天照します大神の傳へ給へる御鏡に己が  
かけをもうつしつゝ朝な夕なに拜むべし

八咫鏡と云へる八咫ハ八寸  
許なること著し然て咫の本  
語は阿多なるが其ハやがて  
手の義なり故に其横經を用  
ひて物の長な度を阿多と云  
ひ其數の彌加れるを八咫と  
云ふ一手の廣さ四寸なれば  
兩手よてハ八寸なり其度な  
る御鏡なりし故に八咫鏡と  
云ふ

いはりハ靈符の類をいへる  
なり俗言にも靈などのいふ  
るさいふも同くしてすべて物  
のおぼるにして明らかなら  
ざるをいふ言なり

さだかに決定にてハツキ  
りとなり

八咫の鏡の御教も今ハ此身に知られつゝ  
あな淺ましき我心造れる罪の恐ろしき天  
と地とを恐れつゝ神の御前にふしまるひ  
歎く心をえろしめし天照します大神の放  
ち給へる御光に我身の罪は朝霜と消る嬉  
しさ八百萬千萬神の神等は峰のいはりを  
かきわけてさだめにきこし給ひつゝ守ら  
せたまふたふとさは何に譬へむ物もなし



六の祝詞歌謡の教祖の作  
なるが書宮津藩主本莊宗秀  
慶明治六年一月神宮教會神  
拜式の末に掲げたるを寫し  
出す

唯御祓を唱ひつゝ諸神等に仕へまつらむ

訓歌

あな尊と天照ます大神の御末なりける大  
御代に生れいでつゝ山櫻朝夕かざる花の  
香の身に志みてこそ忘れぬ神の恵みを  
給はりし人そ誠の人の人なる  
何事もあらぬ此身を嬉しくもまもらせ  
たまふ天照す神

初産靈ハ改修行副教師の傳  
ふる所にて本教現今改修行  
専務心得ある教師の稱号  
なり

玉神百首  
しるしのなりづるもさは  
神むすび高みむすびの神の  
むすびぞ  
さあり、なりづるもさハ成  
出る源なり人類の生れ出る  
事万物の出来ること万事の  
いでくる事おさなふすべ  
て物を生せしむる靈の神な  
ればかく御名つき給へるな  
りむすびのむすびいふ  
むすにて物を生するかいふ  
言なり

むすび直のこと

各様御執心にて御修行御座候に付初産靈  
傳御許し申候此産靈と申事は高皇産靈神  
の御徳を學び奉る事にて御座候其御徳義  
と申すは悪く生れ候を能きに結び直し申  
候事にて御座候委細の故よし男也主馬阿  
人より御傳へ可申上候男也主馬同道にて  
御地へ罷出候様申遣すべく候其節御傳御

法子出生は門中教子の出来  
るまいよ

公事提議集神に御説の事を  
記して  
荒魂和魂を祝ふる為  
なり云々

受可被成候右の御傳受候上は何卒法子御  
出生相待申候兎角法子出来候様御修行な  
さるべく候初産靈と申候は法子出来候修  
行仕候事に御座候法子百人に至候へは神  
皇産靈神の御徳あられば高皇  
産靈神の御徳を知ると申事に御座候只々  
悪縁にて生付あしき心の輩をは能縁に結  
び直し善人に致候が修行にて御座候然ら

は悪人は我等が神徳を得候種に御座候間  
必々悪人を憎む心を捨て御愛し御教へな  
さるべく候老子經にも悪人は善人の寶也  
善人は悪人の仇敵と申こと御座候色々申  
入度候へとも又々申上べく候以上

九月

正鐵

高橋龜次郎様

澁澤六左衛門様

田部井 伊惣次様

玉に瑕

先達中書狀差出申候處御旅行の由御返事も参り不申いかゞ御座候や御案事申候御様子承度候少子も無事に罷在候間御安意下さるべく候

一木下川上野一條段々御骨折の段忝存候

上野一條は村越にて上野  
輪王寺宮ノ御座候事也

聖御免印を御致せし事  
を内願せし事

若宮様候事也

いかゞの様子に候や此節世間の風聞承度存候寅八丁堀其外奥連中御様子一向相分り申さず承度存候  
一貴兄御兩人兎角受よろしからず候の由承り心配致候御兩人共に身心ともに法よ投棄御骨折御座候ても世間にては左様には不存候只々少々のよしあしを申し困申候少子杯もどかく婦女子の心を察し候事

出来兼愚どもに遊ぶ事成かね申候には  
困り申候乍併夫も神明の御恵にて名玉に  
瑕あるやうに思はれ申候にて御座候何卒  
此上は御兩人とも少子歸國まで酒を神明  
へ差上候て御やめ少子歸りを御祈念下さ  
れ候様相願候左様候は自ら人の用ひも  
よろしく我等が歸國の手懸りにも相成申  
べくと存候筆とり候て其方を思出し候へ

玉飾百廿  
動く人の風情うさ  
さいひてはみらふ人は若木

ばたゞく落涙のみ胸ふさがり申上候事  
も十が一つも出来申さず候宜しく我等の  
心中御察下さるべく候後便又々申上べく  
候以上

五月廿三日

正鐵

野澤様

加藤様

野澤鐵教氏  
加藤勇司氏也

子守のこゝ

御書面の趣委細に承知仕候寅君若君御難  
の由難有事に候乍恐東照宮御難の節御家  
人等難に御逢候人々は何れも後の世まで  
へも名を残し御家目出度御座候其御難を  
逃れ遁走り候者は皆身を亡し家を失ひ申  
候國の爲万民安泰の爲に難に逢候もの神  
明是をあはれみ給ひて必ず守護なし給ふ

べし若守り給はずは神明は申奉らじ  
心たに誠の道に叶ひなばいのらずさて  
も神や守らむ

こ申す歌を一休和尚の  
こゝろたに眞の道に叶ひなばいのらず  
とても此方はかまはぬ

又法然上人親鸞上人日蓮上人其外何れの  
祖師方難の節弟子方も難に逢候人々後に

一派を開きし之必何れも神に成らせ給ふべし我等が歡び不過之候  
 灸を灸て遣てあんどの親心山みせにとて守の連ゆく  
 此守は加藤長沼男也此母なるべし併ながら寅君は年もとりれとなしく聞分もある故に守も入まい野澤は難に逢てもあいつは年丈け凌くだらうか行義がわるくて困

本居宣長大人曰  
 道に叶はずして世久しくあり習ひつる業。よハハに止むとするは遅し。たゞその善ひの筋なき去て。ある物は有るにてまじ置て。眞の道は尋ねべきなり。万の事を。強て道の任に。直し行はさするは。中々に道の意に叶はざる事あり。万の事。興るも亡ぶるも。盛なるも衰ふるも。みな神の御心よし有れば。更に人の力もて。得難がすべきわざには非ず。眞の道の意を悟り得たらむ人の。さのつらら此理よく明らめ知べきなり

安治三教團の弟子等を導くゆづをしばた人の思ひはるりとさの限りあるもの故うざりなき神の御徳を知らしめむとの趣よて則本居大

らうかれとなしくなされ追付遊びに釣に連て行ませう夫迄おとなしく留守をなさい男也此母も永々守をしてやつたからちご成人した事だらう妹や弟を守をなされ子さもどち守りをされたり守りしたり天神さまへまゐる道みち  
 一當地に生れ子ども多く御座候乳計りにて膝子は世話おほく母ばかりの手にてそ

人の御教育とその意同しう  
れば何事も已むまじしかな  
捨て置く其の道な事ゆへき  
ふまなり

たて候には困り申候何こそ此子供ちよろ  
ちよろあるき致候迄は食物御送り下され  
候様御門中御相談下され御計下さるべく  
候又大己貫少彦名両神まづの岩屋へ引籠  
り薬まじなひの法を發し病難をさけ蒼生  
を憐みて安國と平けんさなし給ふ少子も  
日々多用に御座候御察下さるべく候  
一四方御連中にて清兵衛殿おとなしく行

義もよけれど智慧がある故後先に考暗み  
病にとじられ育れそく安兵衛どのは永く  
里子につかはし候まゝとかく兄弟の中に  
も馴染うすくばにかみ心にて育ちあしく  
併ながら行義は他人の中に育候故あしか  
らぬ事に御座候とゝく法子多きやうなさ  
るべく候作次郎殿門中へ御縁談相整のひ  
候よし何より目出度御事に候彌御修行專

一の事に候うれしさの父の思ひの御哥面  
白く存候返し

八聲なるこゑをつゞめて一こゑよきか  
せてたべや天照す神

半次郎殿御書面御歌御心中察入候難有こ  
とゆゑ書面其地へ遣し申候御門中御方へ  
御見せ下さるべく候御覽濟候はし又々此  
方へ御遣し下さるべく候

智早振神は  
イチハヤブニイナ略キテ云  
ルニテイナハ強キ勢チ云  
フ  
ハヤハ俗ニ氣ノ速キ氣ノス  
ルドキナド云フコト  
アルハ神サビ神サフル宮ビ  
宮アリ夷ビ夷フリ杯ニ同シ  
ク其有状チ云フ  
崇ハシク荒キ神チ云フ也

一爲次郎殿兎角學者故智恵にて智早振神  
に乘うつられ申候御用心く七夕の歌面  
白御座候世にいふ歌よみなるべし  
一四方御連中色々の品々御送り下さるあ  
りがたく奉存候則神前へ備へ門中大喜び  
に御座候  
一池小米庄御神前へ御備物ありがたく候  
門中打寄頂戴致候當所には椎の實椎たけ



さつま芋里芋此品澤山に御座候其外の品  
は一切無御座候皆江戸より取寄申候事に  
御座候男の渡世は鯉釣申候女の渡世は八  
丈木綿織申候又山へ行薪を採りさつま芋  
里芋を作り申候水拂底の所にて女は水汲  
候が第一の役にて候是は男にても出来申  
さず候其故は足場悪く嶮岨の山中を頭の  
上に水桶を乗せ半道もある所より汲取り

申候其妙術此所の女ならでは出来不申候  
山中の水出候も牛のよだれほこ出候水を  
村中にて飲水致候事故半日位はかより  
申候都て女の働きにて薪もとりさつま芋  
も作り申候事に御座候まゝ女も男があや  
まつて居る事にて男は一向つまらぬ事よ  
御座候女の姿は髪はおどろに乱れ湯水は  
つかはず身にはつゞれを着し野山も働候

ゆる手足恐ろしく座ることなく足は投出し口には悪言上手にて誠に目を驚し候事に御座候

一野菜類無之困り申候あらめひとき御送下さるべく候盤の外一切無之候間するめ干物少々御送下さるべく候かやう成品を餅にいたしよき釣を致し候我等こゝは當地に出来候さつま芋椎の實を食し居候故

身體健ま覺申候是にては長壽なるべく存候御歡下さるべく候先達中御送りの品皆餅に致し此節魚多く集り申候是にては追々漁も出来申べくと存候御よろこび下さるべく候餅には米の飯一番よろしく御座候次に味噌醤油に御座候兎角餅なくては漁も出来申さず候

一加藤 野澤 男也 此母 主計 爲次郎

作次郎 米庄 木下川おさく治郎一  
半次郎 栗原 保木間兩人 長沼おこと  
花尾屋 善吉 樗澤 晴心 瀬下  
右の御書面御歌面白く存候御同門中へ御  
見せ申上候御覽相濟候は、早速取落なき  
やうに御返下さるべく候色々申上度こと  
多く御座候へども此節甚以て法用おほく  
取込居申候間跡より申上べく候以上

九月廿二日

正鐵

御同門中様

内清淨

去十月中御書面相届致披見候先以貴家皆  
皆様御信心御堅固御修行の由大慶不遇之  
候次に小子無事罷在候間御安意下さるべ  
く候

一牛込へ御引移の由目出度候夫に付色々  
 御用多之段御尤に存候依て申入候  
 神道は白木造りに萱の屋根簀子のねだ  
 にたてし御かゞみ  
 内清淨が專一にて御座候外清淨にて内穢  
 れ候へは心中安からず我心安からざれば  
 人をも腦まし申候事に御座候貴兄事兎角  
 表をはり人に負まじ笑はれまじと思召候

天明八年正月廿九日内裏炎  
 上同年五月松平越中守白河  
 定信朝臣御焼失跡見分傳奏  
 所司代兼高南外公武の役人  
 一同なり白河候衣服  
 御子の羽織麻の帷子木綿  
 の股引

在府登城の時  
 麻靴羽二重小袖  
 平日の絹袖の衣服  
 在國の時小袖  
 食物の平日一汁一菜式日一  
 汁五菜  
 又通務公徳川十二代家慶  
 時代に仙臺中將慶邦  
 朝臣五月の登城し服装ハ薄  
 紙子羽織葛布の袴黄びらの  
 帷子  
 右等の例を見ても身分も  
 あらぬ虚飾を戒めざるべか  
 らず世上の有様慨歎の至な  
 り

氣質ゆるるに苦しみ候内心清淨なれば外は  
 何程見苦く御座候てもよろしく候必々内  
 清淨を御守り外は見苦しく成さるべく候  
 内心が安く候へば段々美しくなる者に御  
 座候貧乏神は外へ追出し福の神を内に祭  
 り成さるべく候浮世の有様は皆々貧乏神  
 を内に祭り福の神を外へ追出し申候事に  
 御座候是が當時世の中の大病と成り居候

事に御座候此の大病人を直し給はんと神  
明御骨折に御座候其御世話介抱を致し候  
が貴兄らの役にて御座候夫を勤めされば  
神明の御心に叶へ不申様々の心痛發り終  
し罪を犯し候か又は身の徳を失ひ申候鬼  
かく是をは成しかけし事故に仕舞此後  
ら心掛申べくなと思ふ者に御座候へども  
夫が縁になりていつ迄も盡ぬものにて御

座候其心を其座にて直しからりと改め不  
申候へは悪き縁付まどひ困り申候此所よ  
くく御考可被成候猶又秀三男也池田屋  
などへ御相談成さるべく候池田屋等は其  
事よく合点致し居候又四方清兵衛なとも  
心得居申候當時世の中萬人の苦しみ候は  
唯此事よて御座候問答書にも申置候是計  
りが大切な事に御座候内清浄し成し福の

神御祭り貧乏神は外へ追出し凡夫に御笑はれ成さるべく候凡夫に笑はれても天津神國津神誠の人に笑はれ不申候へば宜しくと思召成さるべく候萬人の惡き心を安くするが貴様の役にて御座候然るを民の血を以てぬり肉を以て建し家には神はやどり給はず見るも穢らはしく思召候事に御座候まひ若血を以てぬり肉を以て家御

建成され候はゞ打こはし捨て御施成さるべく候よき身曾岐成にて御座候先年梅田御宮も不淨の混り候と存候夫故繁昌せぬと覺申候民の血にてぬりちらしては法を學び候家には成不申候心々小屋かけにて乞食小屋のてこく御住居成さるべく候かく内清淨に成ば後は諸民子の如く集り神明より御住居御建立下さるべく候古歌に

日本紀實和歌集  
侍大鶴國天皇

左大臣從二位兼行左近  
衛大將藤原朝臣時平

多賀度能見乃保利天美禮婆  
安女能之多與母前計布理氏  
伊万藤度美致留

高き家へのほりてみれば煙たつ民の竈  
はにぎはひにけり  
中々筆紙に盡しがたく奉存候御同門中へ  
此書面御見せ御相談成さるべく候右様に  
成され候へは解脱に成り神明の御心に叶  
へ申べくさなくは心中苦しみ増し後には  
外に顯それ大苦しみ成さるべく候過ちて  
改るに憚る事なかれと申事も御座候早く

破れ衣に破れむしるに起臥をなし雨露を  
凌ぎ如此して御修行候はゞ罪咎も滅し神  
明の御心に叶へ心安く開運致し法も弘り  
申べく候若民の血肉を以て作り申候家衣  
類諸道具を用ひてあらば安き事なく不運  
のみ成るべく候必々御用心成さるべく候  
一御母公様へよろしく御望に任せ歌認め  
差上候朝夕に御よみ成さるべく候此歌の

野澤鐵教氏也

意を御守り候は、神明御守護あるべく候  
御心も安く身も安く成り申べく候色々申  
上度候へ共又々後便に申上べく候早々頓  
首

三月

正 鐵

鐵 教 殿

猶々御尊父様へも宜しく御内室様へも  
よろしく願上候以上

家業のこと

家業の義御尋御尤の事に候兎角家業と信  
心と二ツに相成候者に御座候家業の外に  
神明へ御奉公は無之候然らば家業が信心  
に御座候

天照大神の思召は安國の法に御座候間萬  
人安かれと思召候は、其内も我も家内も  
籠り利分有之候右の利分は法の爲に御用



成さるべく候法の爲と申ことは法なき人  
に金銀を施し衣類をほどこし候ても彌情  
着になり助からず却て身のあたと成もの  
に候夫故法を授け候を法施と申候て是よ  
り外の事無之候其法を授け候には法なき  
者の寶とする金銀を以て引入候て法に近  
付け申候事に御座候故神明へ御奉公の爲  
に商をも致し其利分にて神明へ仕へ法の

水戸中納言光國卿の島岡古  
道學を興起あらせられ第一  
には禁裡を殊の外御尊敬遊  
ばされ敷の學者を御抱置き  
諸國の神社佛閣及び在々に  
至るまで多くの人を分け遣  
はされていさゝか一枚二ひ  
らに足らぬ物も古き書物を  
ば悉く御集めなされ夫を明  
細に御吟味ありて神武天皇  
より後小松天皇の御代まで  
御代は百代年數二千年あま  
りの間の事か具に御撰びな  
させられ大日本史と云歴史  
を御作なされ又神道集成を  
も御撰なされ又朝廷の御禮  
儀に關るふを御類聚なさ  
れ五百卷あまりの書を御献  
上となり則其書物をば禮儀  
類典と云題号を御つけ下さ  
れたる事して道の爲し御入  
用として御高三十五万石の  
内十萬石を分ちかれて御座  
し遊ばされ又御家臣の内御  
國學に志厚かりし安藤爲章

入用に致し申候事に御座候我食も法命を  
つなく爲我衣類も家も皆法の身を養ひ助  
くるため法を人に施す爲福貴と成て暮す  
も法の徳を人にあらしめん爲皆これ神明  
へ御奉公にて御座候此所能々御考何にて  
も御家業御勤澤山より利分を取り法の爲に  
御使ひ成さるべく候暇にて暮し候へは迷  
ひの念計り發り五月蠅如神にこそはれて

さいふ人を難波なる契沖の門人に遣はされ万葉集の代匠記を契沖に撰ばせられ其御書に白金千両箱三千匹を贈り賜はりし等凡て皇道の爲に御心を盡されしふと誠に難有御事あり

安治云前の御事どもを伺ひ奉るよも世に富有の人等唯一己の勝手なふけりて金財を消費するふとなく餘財の幾分を以て道の爲に使用し國家に奉公せば自然其家門長久の基礎たらんふと疑なし吾教祖の本文に示されし旨と合せ見て其理を悟るべきなり

苦勞を受る者に御座候日夜神明に御奉公  
忙がしく候へば心も安く身も安く家内も  
安きものに御座候法聽聞は問屋勘定と思  
召候て怠り有べからず問屋勘定怠り候と  
引込に相成候問屋勘定は度々成さるべく  
候小子事も晝は夷様の行にて海邊に釣を  
致し暮に及び宅へ歸り御同門中打寄せ雞  
の啼く迄も相續いたし身体勞れ寐候間能

栖原庄助氏也

豊後原の瑞穂の國よて太平の御世を祝へるなり

寐入候て夢も見不申候又朝夕は祓修行長  
息色々いそがしく御座候へ共心は静やか  
よて腦候事無之候

正鐵

栖原様

あしはらのあけれる中に松たて、  
新玉の春安國のさと

見ぬ孫

未御面會は致不申候へ共御文下され相届  
申候此度御法御いたゞきのよし難有御う  
れしく存候

見ぬ孫のなごなつかしや旅の秋

たゞ此上は御いたゞきの御信心御成長な  
され候様いたし度聽聞は信心の乳にて御  
座候乳房をはなさぬ様成さるべく候乳房

万葉集

思子等歌

うりはめばふどもおもほゆ  
くりはめばましてまのばゆ  
いづくよりきたりしものぞ  
まなかひにもまなかひよりて  
やすいしなご

いづくより云々いかな  
る過去の因縁にて吾子と  
生れ來しものぞ也  
まなかひは眼之間にて常  
に目前に在如く思ふ意か

やすいしなごのしは助  
辞にて安んずる事をせぬ  
也

筑紫にて京に留れる子等  
が瓜をばみ粟をばむにも  
さらぬ時とも面影に見ゆ  
るをいへり

本文のなごなつかしやと歌  
子を戀る眞情を此歌のいづ  
くよりきたりしものぞ云々  
さくらへ見て情實をささる  
べし

にさへはなれず聽聞候へば三年立候へは  
獨歩行出來申候乳房をはなし聽聞すくな  
の者はやせ子にていつ迄も育ち申さず其  
上むしけなど發り氣をもみ申候者に御座  
候又祓の中に生れ候事ゆる祓唱へず候へ  
ば魚の水にそなれ候様に成もの候間信  
心絶へ申候尤大聲にて唱ふる事成かね候  
折は長息の傳御勤成さるべく候祓の根元

にて難有事に御座候猶此文秀三其外御同  
門中へ御見せ御聽聞成さるべく候私より  
も孫弟子のゑるしに御神號一枚送り申候  
色々申入度候へ共又々跡より申上べく候  
以上

正鐵

おふぢ殿

孫の顔みねを戀しき老が身はなほ行く

さきの思ひあまれる

朝夕に教へそだつる孫子より見ぬ孫子  
らに戀わたるかな

假の姿

六月十九日御紙面拜見致候先以御両親様  
御安全に被成御座候由大慶不過之候貴様  
御事も彌御堅固御信心御修行の段大悦

勅語述義曰  
親子の間柄ハ骨肉を分けし  
までにて同体一心とも云ふ  
べきものなれば親の子をい  
つくしむハ自然に出て子の  
親に孝行するも亦固より自  
然の事なりされば父慈よし  
て子孝なるべきハ申までも  
なくよしや万一にも其父不  
慈なるふとあるも子たるも  
のは孝をつくすべきこと勿  
論なり蓋孝ハ父母養育の恩  
に對する報酬にあらずして  
子たる者の分ればなり況  
して父母は吾を育るよいか  
なる苦勞心配なせしぞ吾  
はいかにしてよく成長せし  
ぞ先祖は吾にいろなる幸福

奉存候小子事も無事に修行仕居候御安意  
下さるべく候

一御身分の儀御申趣御尤の事に候萬事橋  
澤へ御相談御定成さるべく候孝經の序に  
も孝は百行の本と有之候唯々今の御身の  
上にては御両親御安心の出來候様御勤め  
成さるべく候父母を安からしめ樂ましめ  
候事出來不申候へば本を失ひ申候間萬事

なのみせしぞ心靜に之を思  
はゞ必ず已みがたきものあ  
らん故に常に此心を以て克  
く其父母先祖につらうるハ  
則人の人たる道にして我國  
人民は先祖代々此の美體を  
欠きしふとせしされば父母  
の志をつぎその事をのぶる  
は實に子たる者の第一のつ  
きめなりと知るべし兒童た  
るもの克く其父母に孝なら  
んぞ欲ば先づ克く父母の  
命令を守るふとより始めよ  
平田篤胤大人歌曰  
親はよしおやさあらずも吾  
や子の子たらん道をつくま  
であらめや

成がたく半にして整ふ事なし能々御考成  
さるべく候父母を泰山の安きに置き其後  
の事に御座候是を御勤成さるべく候貴兄  
は万事に行届候へ共此事整はず候まゝ神  
明の御心に違ひ申候行住座臥父母を安か  
らしめん事の外なしと思召候はゞ神明の  
御心に叶へ申べく候此所能々御考成さる  
べく候身分姿は假の姿ゆる如何様にても

宜しく御座候手習師匠は万事小兒に教諭  
し候者にて難有業にて御座候能く御教諭  
神明の御徳御法の御徳を顯し候様成さる  
べく候貴兄事は別に小児も頼に致候事故  
何とぞ御骨折御修行成さるべく候  
一小子事此節ゑびすの業を致申候間釣糸  
御ねだり申上候當地は大海の荒磯に候間  
釣道具もかえり申候其方にほら釣と申候

一番ふとき釣糸を三十ひろ位の糸を三把  
御求下さるべく候右の三筋を此方にて一  
筋に合せ長さ三十ひろ位の糸にて魚釣候  
へはなわを心の儘に引せなわ殺しと申候  
を致し引上申候事に御座候三尺位のふり  
又はさし魚など申候大魚釣れ申候何とぞ  
大ほら釣糸三十ひろ位の品三筋御送下さ  
れ候様に奉願候ほら大釣針十本鮎大釣針

十本右の三品此度御もらひ申度候色々申  
上度候へ共古郷への書状相認候と無常の  
心起り胸ふさがり申候間荒々申残り候何  
こそ此上御身の上吉事目出度御事御聞せ  
奉願候其方種々の事承り申候となきりに  
歸國致度又よろこび候事承り候と安心安  
住致申候早々願首

正鐵

病身の我子へ

古歌に

病子をば残してこゝに旅の空心はあこに  
のこりこそすれ

此心思ひあたり候猶其許は右の病人介  
抱の人に頼み候を病み玉ふと聞て涙の  
外なく候

泣く涙すゞりの水とかく文のなか思ひ

のとらざらめや  
吐善加美るみ多女

片岡啓次郎殿

脩身齊家

御書面拜見致候身を治め家を治め國を治  
むる道中に書面を以て書つくしがたく又  
言語にも述がたし然れども信心御傳へ申

上候御方に候へばたとへにも又書面にも  
申上候事いと安し難有御事にあらきや信  
心は則神心なりたとへば此明德を得れば  
闇の夜に燈火を得たるが如し初めて我家  
の事を知り我身の事を知る然るに其悪き  
まば直さずして色々心を苦しめまた信心  
の徳を忘れ我智を以て治めんと思ふゆる  
神明をくらしまし奉り迷ふものなり只神徳



を仰ぎて神心を強く盛に成し神の祭りを  
守り可申候祭りは則唐にいふ禮なり祝詞  
歌をうたひ太鼓を打は樂なり只此禮と樂  
とにて家も國も治るなり誠に尊き事なり  
猶分り兼候事は幾度も御申越成さるべく  
候追々申入べく候以上

鐵正

澁澤六左衛門殿

手習子

去十月中御書面相届披見致候先以御信心  
御堅固御修行の由大慶不過之候次は小子  
無事に修行罷在候御安意下さるべく候  
一永息傳御祓御修行候ても目に見ゆ耳  
にも聞ゆずいつ發明候やと御退屈のよし  
御尤に御座候夫は日々心安く睦ましく暮  
し候が神明の御加護にて御座候其を御歡

成さるべく候目に見ゆ申候又心安ら  
ず又は心配災ひ出来候節は彌長息傳御祓修  
行致候へば其時發明致し申候ものに御座  
候是災を變じ幸と成し候事にて御座候若  
幸と成らずは修行の足らぬ故と思召候て  
長息傳彌御勤成さるべく候終には幸と成  
申候

一御心御氣にすめぬ事は御申出よろしく

御座候併しながら我思ひは悪き思ひにて  
皆迷ひと思召候上に氣にすまぬ事を御申  
出し候は宜しく我思ひ善と思召候は御  
申出し候は悪しく御座候  
一庭掃除其外色々御勤のよし身体を働か  
せ候が宜しく御座候食事も鹿食少食身の  
薬美食大食身の毒といふ事能々思召御修  
行候へば後には鹿食小食甘く心よく覺候

本居宣長大人の玉體間に  
「世の人の神を等閑し思ひ  
奉るは返すべし心さきわさ  
なり。さるは程々事さみ  
奉らぬよしも非ざんめれど  
唯世の習ひの。人なみく、  
のいにての尊みのみも  
あれ。實に心にして尊み  
奉るべきことを思ひ辨へ  
す。たゞ、御座よぞ思ひた  
る。目にみを見ねれ。六の天  
地万物の出来始めし。又  
むかし今の世の中の。大  
小諸の事も。人の身の上  
くひ物着物居ごころ。何  
れもろくごころ。悉く  
神の御事に係らざる事なき  
な。さる故由をば忘れはて  
い。なべての人。たゞ、  
日の狂事にのみまよふり。  
心を傾けて。方にさかした  
つ人。ハハ漢籍心を心せば  
して。希々に神代の御事ご  
もを聞ても。たゞ、逆りき世  
界の音語をきくごころ。

者に御座候始めは先入の癖止み申さぬも  
の御座候  
一子供手習御教のよし難有事にて御座候  
是を皆々神より御授けの我法の子と思召  
子供のうちより神のありかたき歌または  
御神託など書遣はし其心を口釋など致し  
遣はし教諭し後には誠の信心も得道致候  
やうに心掛候ハ、神明の御心に叶へ神徳

そげにのみ思ひすとして。  
そは皆今の世の中。おのが  
身々の上へ保れる本なる事  
を思ひたごらす。万づより  
も尊きは。神の社神事の  
衰なるな。いばかりめでた  
き御代よし。神の古き神  
の御社ごもの大づく衰へま  
せるな。直し立て奉らん  
の。心ざしある人の。世よ  
出来ぬも。甚い。くち  
惜けれ。そもく宜長。か  
いひ出るな。人はうるさし  
さも思ふらめど。此事の概  
さの。朝暮心に忘る。間も  
なく。むら。から。筆だに  
されば。書いてまほしくな  
む。

治まれる御代のあるしを  
千木高く神の社に見る由  
もがな

安治云前御教とて誠に貴

貴兄の身に満申べく候此慈悲は廣大なる  
功德にて御座候何とぞ祝詞歌にても讀み  
覺させ候様に成さるべく候子供は悪き癖  
なき者故追々信心も募り誠の心も得道致  
し申べく候まづ世の中へは天神様と御申  
聞候様成さるべく候廿五日は御祓御修行  
天満宮御畫像を掛御祈念成さるべく候  
一雷御母公様御嫌のよし長息の傳御勤め

くらしよく何ひ奉るされば  
教祖の大人も本文の如く子  
供も神の御恩を能く知ら  
しめよと云はれし也人々等  
爾に見通すべからず

慶次郎ハ坂田安齋の幼名  
なり

候へは信心の上からは直り申候小子など  
も病にて雷啼候と腹中動き困り申候信心  
得道の上からは長息相勤め段々と直り申  
候猶雷啼候節祓を高聲に唱候が宜しく御  
座候

一御両親様の御申聞候事は善悪を捨御用  
ひ成さるべく候此事は四命の事を書候書  
に御座候慶次郎殿より御聽聞成さるべく

候

一岩戸開祝詞歌書送り候御謠成さるべく  
候慶次郎殿へも御見せ下さるべく候

古しへの天の岩戸を今こゝに傳へ玉へ  
る法の道暗き闇路に入ぬるを神の恵ぞ  
ありがたきやがて明ゆく志のよめの松  
に日のてる御光は天照します大神の誓  
ひ嬉しき身なるのに我と我身の思ひ火

慶次郎の神傳録の事を云は  
れしなりそは天照大神神天  
の岩戸よまし降り玉ひし時  
天の宇豆女の命の行ひ玉ひ  
し神事なり古語拾遺に録  
し之に依りて天の御女命之遺  
跡也とあり

松に日のてるの松は徳川幕  
府の松平をせしたるにて則  
天皇の御任を蒙りて天下  
を治め給ふ御威光を申し  
也

醫ふまはのそに  
神うけてちぎるふま又佛の  
人をすくひ玉はんその心の  
さだめさありふし神の助  
け玉ふを云われし也

に胸のほのふの絶やらで一つ火ともす  
あはれさとはやふり捨て大神ののりの  
まはく仕へまつらん

吐善加美依身多女

一御同中のあるしに何か差上候様御申越  
に候へども信心の外なく御祓を授け候外  
なく候乍併愚筆にて何の書物差上申べく  
候御神前額に成さるべく候此度絹地御差

越下さるべく候相認め差上申べく候

右は御申越の趣荒増申上候愚筆不文ゆゑ  
分り兼申べく候間分り兼候義は幾度も御  
申越成さるべく候御答申上べく候必々分  
らぬ事を捨置に成さるまじく候分り候迄  
御申越成さるべく候先は荒々申残候頓首

三月

正鐵

府下竹塚なる河内久麻主な

武胤殿



明治三十二年八月廿六日 印刷  
同 年八月三十日 發行

著者兼  
發行者

東京府平民

坂田 安治

下谷區西町二番地



印刷者

東京府士族

櫻井 一新

下谷區西町三番地

發行所

東京市下谷區西町二番地

禊教本院

